第１学年２組　授業研究　まとめ

指導者　髙須　悠

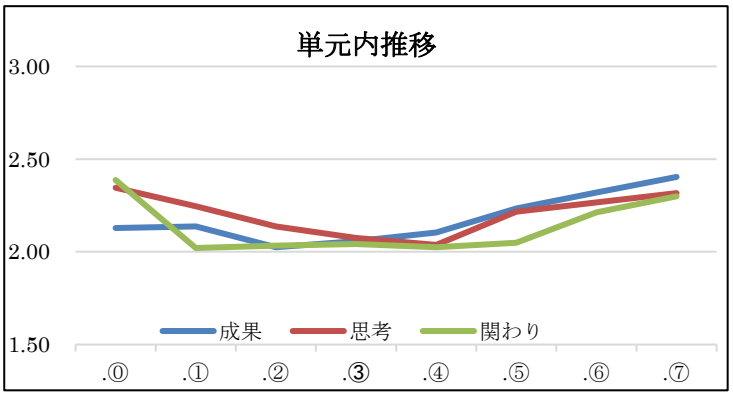
１　単元名　　にんぽう！とびばこのじゅつ!

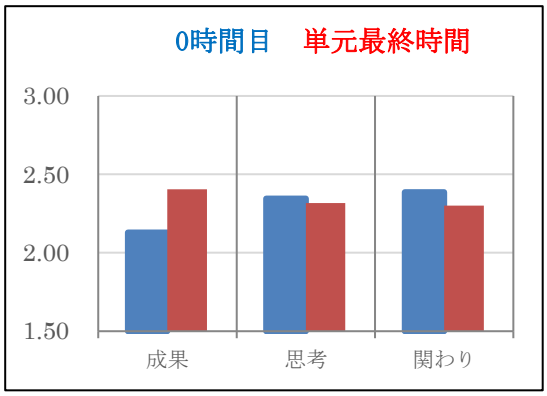
（器械・器具を使っての運動遊び・跳び箱を使った運動遊び）

２　児童の変容

（１）情意面　（形成的授業評価をもとにした授業評価から）　男子１８名　女子１４名　計３１名

（一時帰国　１名　骨折１名　未実施２名）





・「成果」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。児童にとって目標とする技に対して少しずつ自身の伸びを感じられたことが考えられる。３時間目以降の数値は向上していっており，課題解決学習において，一人一人が課題を解決するために試行錯誤した結果，その時間で少しでも技能の向上を感じることができたことがうかがえる。

・「思考」は単元前よりも数値が低くなった。知識・技能の習得に重点を置いた単元前半は低い数値だったが，思考をはたらかせる学習を重視した単元中盤から数値が高くなっていった。これは，教師が思考をはたらかせるための学習を意図的に設定したことで児童も自身の課題を解決するために思考しながら運動遊びに取り組むことができていたことがうかがえる。

・「関わり」は単元前よりも数値が低くなった。単元前半はサーキット形式の運動遊びに夢中になり，友達との関わりが薄れてしまったことが考えられる。単元中盤以降の数値は少しずつ高くなっており，自分のめあてに対して，グループの友達と見合いながら学習したことが要因であると考える。課題解決学習においてペアの友達と関わり合いながら，学習できたことで，数値が高くなったと考えられる。

（２）技能面

	①踏み越し跳び（３段）（助走・踏切り・着地が途切れずにできている。）			②跳び乗り（３段）（両足で踏切り，跳び箱に両手を着いてまたぎ乗ることができる。）		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	９	１２	８	５	１２	１２
単元後	１５	８	６	１３	１６	０

	③タイヤとび（両足を踏切り，タイヤに両手を着いたまま，跳び越すことができる）			④馬跳び（両足を踏切り，友達の背中に両手を着いたまま，跳び越すことができる）		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	４	８	１８	０	８	２１
単元後	１５	７	７	１１	９	８

・単元前と比較して数値の上昇が見られる。馬跳びで必要とされる力を習得するために，体ならしの運動の際に動物の動きを繰り返し行ったことや，跳び箱ランドをサーキット形式で行ったことが技術向上の一要因として考えられる。また，単元後半の課題解決学習の際に，自分のめあてを意識した運動遊びができていたことがうかがえる。

・本単元の主運動である馬跳びは，できる児童とできない児童の二極化が起こってしまった。体ならしの運動の動物歩き，跳び箱ランドでのポイントに絞った場づくりを行ったが，最後まで馬跳びができなった児童は多くいた。

（3）思考面

問　うまとびができるようになるためには，どうすればよいとおもいますか。（複数可）			
単元前		単元後	
・足をぴんとする	1	・とん・とん・ばし・ぴたをする	１５
・手をぎゅってする	1	・ばんを強くする	6
・うさぎみたいにする	1	・ぴたを頑張る	6
・高くとぶ	2	・うさぎとびを頑張る	3
・手を伸ばす	1	・とんの時に両足をそろえる	4
・自信をもって跳ぶ	3	・強く踏み切る	1
・手を押す	1	・高くとぶ	1
・手を強くおす	1		
・足を広げる	5	※とん・ばん（踏み切り）	
・たくさん練習する	4	※ぴた　　（着地）	
・高くジャンプする	1		
・跳び箱ができればできるようになる	1		
・大きく足を開く	3		
・同じ高さで跳ぶ	1		
・高く跳んで足を開く	1		
・手に力をつける	1		
・こわがらないでやる	1		
・足を大きく伸ばす	1		
・手に力を入れる	1		
・友達の背中を押す	1		
・跳び箱を跳んで練習する	1		

・学習中の「ぴたっ」「とん」などのオノマトペが多く使われる記述が増えた。児童が課題解決に向けてポイントを意識して学習できた成果だと考える。また，児童が技能ポイントを意識し，課題解決に向けて考えながら学習することができたことも一要因だと考えられる。

３　成果と課題

低学年のめざす姿
見合う伝え合う活動を通して，自分のめあてに向かってくり返し取り組む児童

【成果】

・学習中にオノマトペを使った言葉かけができていた。
・教材を工夫したことで，児童が楽しく意欲的に活動する場を作ることができた。
・各場での運動遊びのポイントを意識した体ならしの運動ができた。
・めあてを絞ることで毎時間自分のめあてを意識した運動遊びをすることができた。また，運動のポイントに対してペア同士で「〇〇ができていた」などの認める声や「ここを〇〇したほうがよい」などのアドバイスができている児童がいた。

【課題】

・教師の効果的となる声かけが少なかった。教師が積極的に声掛けをすることで児童が真似したり，より具体的な声掛けができるのではないかと考える。
・ランドのそれぞれの場で何をねらっているのか明確化する必要があった。
・児童の中での気づきはあったが伝え合いが少なかった。児童にあった学習カードの用意や学習カードを工夫することで改善されるのではないかと考えた。
・低学年の関わりとして見ること・数を数える・できているかどうかの見合いを取り入れていくことが必要であった。その際に，ペア児童がオノマトペを活用した声掛けをし合い，リズムが取れるように工夫していく必要がある。